

Title	京大東アジアセンターニュースレター 第612号
Author(s)	
Citation	京大東アジアセンターニュースレター (2016), 612
Issue Date	2016-03-21
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/209710">http://hdl.handle.net/2433/209710</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

2016 年 3 月 21 日発行 第 612 号

## CONTENTS

読後雑感：2016 年 第 6 回<小島正憲>.....	2
【中国経済最新統計】 .....	6



## 読後雑感 : 2016年 第6回

---

22. MAR. 16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員 小島正憲

- 1.「地図ブック アセアン経済回廊」 2.「本音でミャンマー」  
3.「老いを超える生き方」 4.「家族という名のクスリ」 5.「家族幻想」

### 1.「地図ブック アセアン経済回廊」 アジア国境研究会 キョーハンブックス 2016年1月20日

本書はASEAN 域内のデータを、グラフや図、写真などでわかりやすく紹介している。ことに東西・南北の経済回廊を、大小さまざまな地図で紹介し、その周囲の工業団地なども書き込まれている。日本食レストランや日本人対応の病院などの情報も盛り込まれており、貴重である。ASEAN を手っ取り早く理解しようとする人にとっては、便利な書物である。

### 2.「本音でミャンマー」 寺井融著 カナリアコミュニケーションズ 2016年2月29日

副題:「もうこの国の建前論はいらない」 帯の言葉:「“沸騰”するミャンマー “果たして最後のフロンティア”か」

久方ぶりに、ミャンマーに関する単行本が店頭に並んだので、購入して読んでみた。またこの本の「本音でミャンマー」というタイトルにも興味をそそられた。しかし本書で、ミャンマーについて述べられているのは、約1/3で、あとは中国などの探訪記であった。本書はいわば寺井氏の旅行記のようなもので、ミャンマーの実相に迫るほどの力作ではなく、その意味で「本音でミャンマー」というタイトルにはふさわしくない。

多くの国についての旅行雑感が綴られているが、その信憑性については、若干、疑問が残る。たとえば、「1977年11月、2週間の日程でベトナムに行った。これも“日本青年代表団”の一員としてである。サイゴン陥落から2年半後だから、ベトナム反戦運動をやっていた青年も多い。ハノイが米軍の空爆で廃墟となっている、と勘違いしていたらしく、フランス風の落ち着いた町並みで、爆撃跡もほとんど見ることもない現実に、ただただ驚いていた」と書いているが、私がサイゴン陥落の3か月後に、ハノイに入ったときには、大通りには空爆除けのタコつぼが無数に掘ってあり、まさに余塵がくすぶっているという感じであった。これは私がこの目で見てきた事実である。寺井氏とはかなり違う。

またミャンマーのロヒンギャ族問題についての記述も、ミャンマー側からの視点のみで、バングラデシュ側のラム市では、仏教徒がイスラム教徒に激しく襲われたという事実や、バングラデシュ政府のロヒンギャ対応については、まったく言及されていない。寺井氏はロヒンギャ問題を一面的に扱っているわけであり、この記述は深みに欠ける。またマンダレーについての記述についても、レパダウン銅山問題にも、過激派仏教徒のイスラム教徒襲撃事件にも、言及していない。これらは政治的に、極めて重要なものである。ながらく政治畑を歩いてきた寺井氏が、これらについて、「本音」で語っていないことに、物足りなさを感じる。

また寺井氏は本書で、「ところで、なぜ2011年の民政移管となったのか」と問いを發し、「それはまず、ミャンマー国民自身が、民主化をのぞんでいたこと、それに尽きる。経済の低迷から脱出したい。近隣諸国の発展に追い付きたい。自由と民主主義で明るい社会を作りたい。これらは反体制、体制側を問わず、実は広く内なる国民の声であった」と答えている。これも模範回答ではあるが、平凡なものであり、ミャンマー民主化の実相を解明する答えとしては、インパクト不足である。

### 3. 「老いを超える生き方」 枡野俊明著 さくら舎 2015年11月13日

副題 : 「禪的人生の英知」 帯の言葉 : 「毎日をかけがえのない“好日”にする方法」

著者の枡野氏は、禪僧であり、坐禪や禪語を通じての人間の生き方を追求した著書が多く、禪寺の庭園デザイナーとしても著名である。本書にも、禪語をもとにした「老いを超える生き方」が書き込まれており、参考になる。ただし私がいつも言っているように、日本の歴史上でも、「死」を前にして泰然としていた禪宗の高僧たちの方が少数派であり、修行を積んだ高僧たちの多くが、従容として死を迎えたわけではなく、むしろ生への執着心を断ち切れず、あたふたしたという事実の前には、禪語も禪の修行も無力なのではないかと思う。現在の超高齢社会を生きる老人に必要なものは、「楽しく死ぬ」思想である。この思想を、宗教家や哲学者が、総力を上げて創出し、それを実践することが急務であると、私は思う。以下に、私が参考になった箇所や反面教師として学ばなければならないと思った箇所を抜き書きしておく。

- ・下り坂なんてとんでもない！ 若さのなれのはてが老いだなんてことは、断じて、ないのです。楽しい上り坂が人生を終えるまで続く、それが老いという時期です。
- ・心のありよういかんで、青春期はいくらでも伸ばせるという気がします。いつまでも洩垂れ小僧の心意気を持ち続けませんか？
- ・いたずらに喪失を憂うのではなく、その貴重な財産を活かすことにつとめる。そうすることで、「いぶし銀」としての存在感がでてくるのです。
- ・禪では、そうじはみずからの心を清らかにし、磨いていくものだと考えています。
- ・「死ぬる時節には死ぬがよく候」(良寛)。これがおまかせするということでしょう。死ぬときがきたら、静かにそれを受け入れればいい。つねに一息を生ききっていれば、心残りも、未練もありません。従容として死を迎えることができるのです。
- ・「人間はいつ死んでもいいと思うのが、悟りやと思うておった。ところがそれは間違いやった。平気で生きていることが、悟りやった。平気で生きておることはむずかしい。死ぬときがきたら死んだらいいんや。平気で生きておられるときは、平気で生きておったらいいんや」(永平寺第78世貫首 宮崎奕保禅師)
- ・「寝床につくときに、翌朝、起きることを楽しみにしている人は幸福だ」(スイスの思想家 カール・ヒルティ)

### 4. 「家族という名のクスリ」 金美齡著 PHP 研究所 2016年3月18日

帯の言葉 : 「家庭ほど安らぐ場所はなく、夫婦ほど支え合える関係はない」

帯には、上記の言葉に続けて小さな文字で、「下重暁子さん、上野千鶴子さん、あなたたち

の“歪んだ家族論”に私は

反論させてもらいます」と書かれており、本文は下重氏や上野氏に対する挑戦状のようなものとなっている。金氏はテレビなどにもよく出演しており、その舌鋒が鋭いことで名を馳せている。本書でも、金氏は下重と上野の両氏を、「結婚をしたことがない。子どもを産んで育てた経験もない。代わりに高学歴で、メディアや学界などで仕事をしている関係から公的な立場を与えられた彼女たちが、ちゃんと結婚し、子どもをなし、家族という共同体を営み、社会を支えている人たちの生き方を批判する。家族は病であるとか、個人の自立を阻害するとか、形而上から高説を垂れる。これを傲岸不遜と言わずして、なんと言おう。そして知に驕った傲岸不遜な人たちに社会制度の設計を委ねてはならない」と切り捨てている。さすがに金氏は論客だけあって、本書における反論は鋭く、ディベートとしては、金氏の方に軍配が上がると思う。しかし、私は金氏の反論が、下重氏や上野氏の提起している問題とは、大きくかけ離れており、的違いのように思える。

私は下重氏や上野氏の著作から、現代日本の抱える高齢者問題に、積極的に切り込もうという両氏の意図を読み取った。両氏は、家族という題材を利用して、超高齢社会では家族関係を考え直さなければならないということを提起したと考えるべきである。したがって金氏は、高齢者問題を解決するという視点で反論をしなければ、同じ土俵で論戦することにはならず、それらはすれ違いで終わってしまう。本書で金氏は高齢者問題には一言も触れていない。このことについて、私は金氏に、「両親の介護をしたことがない。老老介護の悲惨な現場を体験したことがない。老老介護が家族崩壊を招くという厳しい現実を知らない。認知症の親を虐待するという直系家族(実の息子や娘)が多い現実を知らない。そんな論客が“家族という名のクスリ”の効力をいかに説いても、老人介護という現実の前には、家族はまったく無力であり、それこそが傲岸不遜である。このような人に超高齢社会の制度設計を委ねてはならない」と、反論したい。金氏は現在、82歳であり、すでに十分、人生を堪能したはずである。金氏が今後、自己決定力を喪失する前に、つまり介護を受ける境遇におちこむ前に、子ども達に排泄の世話をしてもらおうようになる前に、そしてクスリである家族から虐待される前に、いかに「楽しい死」を選ぶのか、その勇ましい決意を聞きたいものである。金氏は「おわりに」で、「ひ孫を抱くことが、楽しみ」などと書いている。そんな言葉は、論客としての金氏にふさわしくない。

金氏は、「家族をつくらずに生涯を過ごして、“おひとりさま”で死ぬとしても、その看取りをしてくれるのは、自分以外の誰かが産み育ててくれた子どもなのだ。やがて誰もいなくなった…という未来を描くのか、そうでない未来のために自分の人生を使うのか。私は、死の瞬間まで後者でありたい」と書いている。金氏ほどの論客でさえも、「看取られる死」を前提にしている。金氏には、「看取られない死」、「誰にも迷惑を掛けない死」を、積極的に語り、それを実践してもらいたいものである。金氏の年齢ならば、「死の瞬間」は目前に迫っているのだから。

## 5.「家族幻想」 杉山春著 ちくま新書 2016年1月10日

副題：「“ひきこもり”から問う」 帯の言葉：「“家族の絆”は神話である」

本書で杉山氏は、「ひきこもり」現象の調査研究の結果から、「“家族の絆”は神話である」と言い切る。本書も前著に続き、現代における家族を題材にした書である。しかし「ひきこもり」現象から、家族のあり方に切り込むという手法は、斬新できわめて面白い。この書を読んでい



て気がついたことだが、おそらく、これから「家族」論争が社会を賑わすのではないだろうか。ひところの「格差」論争のように。下記に、杉山氏の見解を紹介しておく。私は家族に関する鋭い分析を含む、含蓄のある文章だと思う。

ひきこもりの背後には、「自分に課す規範から自由になれないことがある。その規範が与えられるのは、多くの場合、

家庭＝イエである」と私は書いてきた。規範を求めるのは高度化した産業社会だ。人の能力を計り、選別し、社会に配属するシステムを持つ。だが一方、多様な人たちが生き延びるインフラも作られている。思いのほか、現代社会は多様であり、フレキシビリティである。過度に、「規範」に身を添わそうとするのは、将来に不安を感じるときだ。まるで、泳げない子どもがプールのへりにしがみつくように。共同体と呼ばれていたものが形を失うとき、家族が孤立すれば、家庭内の「規範」とは大きくずれる場合もある。これからの「規範」は、さまざまな出会い（それは人だけではない）のなかで、常に新しく創造＝クリエイトしていくものかもしれない。

一方、私たちのクラス日本では、「家族」の役割はとても大きい。家族規範も強い。子どもを育てる責任は家庭が一義

的に持つことは当然だと思われる。責任は一方で「権利」でもある。わが子に家の規範を伝えることは、その親の「権利」だと思われるようでもある。自分の大切な価値観をわが子に伝えたいと思うこと、あるいは、そのことによってわが子を守りたいと思うことは、「愛情」と呼ばれる。だが、それは本当に「愛情」なのだろうか。ひきこもりに苦しむ人たちを見ていると、そんな問いが立ち上がってくる。

次世代に前の世代が与えるべきものは、まず「この社会は自分自身のための場所だ」という確信だ。そして、命が本来持っている成長する力を尊重することだ。そこで初めて、親は子ども他者となり、伴走者になれるのではないだろうか。「私」の願いや怒り、価値観をわが子に伝えるよりも、わが子に他者を感じていたほうが、社会に繋ぎやすい。わが子に他者性を持つことは、実は、現代の新しい「規範」なのではないか。だが、親自身が、自分自身が生きてきた規範から自由になることは、案外難しい。それ以外の生き方を知らないからだ。ある行き詰まりを感じたときには、家族を開き、社会に繋がるのが重要だ。そのとき、的確に繋がれる先が誰にでも開かれていることが必要ではないだろうか。

以上

## 【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 <sub>米</sub> )	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016年												
1月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。